酪農の担い手問題

単身女性が新規就農 宗谷南農協が独自支援で実現

浅見悦子さん

生乳生産基盤の弱体化を食い止めようと、道内各地で農協や自治体が新規就農者の獲得に乗り出している。こうした中、宗谷南農協（本所・宗谷管内枝幸町）は平成25年11月、全国でも極めて珍しい単身女性の新規就農を実現した。就農までの経緯を現地で聞いた。

「女性一人の就農は無理だと言われるけど、まったく問題ない。大事なのは本人の努力」

こう断言するのは枝幸町の酪農生産者、浅見悦子さん（埼玉県出身）。平成25年11月、単身で新規就農した。現在は乳牛27頭を飼養し、年間２００㌧の生乳出荷を目標に、日々の作業に励んでいる。

女性が一人で新規就農する事例は全国でも極めて珍しい。労働力の面で苦労が多いのではと心配になるが、「大好きな牛たちと一緒に暮らせて満足。苦労など気にもならない」と、明快な答えが返ってきた。

自由で素晴らしい仕事

浅見さんが酪農を志したのは20歳の時。動物好きが高じて進学した酪農学園大学2年生の夏に、枝幸町の向井地牧場（代表・向井地信之宗谷南農協組合長）で体験し20日間の実習がきっかけだった。酪農とは無縁なサラリーマンの家庭で生まれ育った浅見さんにとって、乳牛が見せる表情の一つひとつが新鮮だった。

「初めて牛に触り、酪農の現場でなければ学べない多くの発見があった。1頭1頭の牛に個性があることや、教科書には書かれていない酪農の面白さにたちまち魅了されてしまった」と振り返る。

その時、向井地組合長が発した次の言葉も胸に響いた。「俺はこの牧場の経営者。自分の思った通りに何でも決めている。こんな自由で素晴らしい仕事が他にあるか？」

その通りだと思った。将来は自分の牧場を立ち上げよう、経営に役立つ知識は何でも吸収しようと心に決めた。

大学の講義にも身が入るようになった。疑問を解決するために担当教授の研究室に押しかけ、日が暮れるまで質問責めにしたことも一度や二度ではない。時間を見つけては向井地牧場にも通った。最長で45日間泊まり込んだ。

資金が借りられない！

乳牛を大事にする牧場を立ち上げたい―。

浅見さんは夢を実現するため、大学卒業と同時に向井地牧場に従業員として就職。働きながら就農のチャンスをうかがうことにした。

ある日、牛舎の空き状況を情報収集していたところ、めぼしい物件を見つけた。夢の新規就農に思いが高ぶった。

浅見牧場外観

フリーストール牛舎。
天井の梁をなくすなど、作業性向上の工夫がみられる

ところが思いがけないハードルが立ちはだかる。就農しようにも、単身女性は制度資金の給付対象外で、初期投資のお金を工面できなかったのだ。

パートナーとなる酪農後継者を見つけて嫁ぐことも考えた。でも、浅見さんは自分の目指す酪農をゼロから築き上げたかった。生涯をかけて酪農に打ち込もうと決めた彼女にとって、パートナーは思いを同じくする男性でなくてはだめだったのだ。

解決策が見つからない中、それでも浅見さんは黙々と腕を磨いた。酪農ヘルパーとしても活躍した。乳牛の異常を見抜く観察力や飼養管理技術が優れていると、いつしか町内の酪農生産者の間で一目置かれる存在となっていた。

組合長が資金借り入れ

このまま従業員で終わってしまうのか…。枝幸町に来て10年が経とうとする頃には、さすがの浅見さんも気持ちが萎えかけた。このとき手を差し伸べたのが、向井地組合長だった。

浅見さんは「ある時、将来の不安について愚痴をこぼしたら『お前みたいに熱心な奴が諦めちゃだめだ。牛舎を建てるなら、うちの土地を使え』と急に火がついたように語り出して、牧場の建設に知恵を絞ってくれた」と振り返る。

向井地組合長は、制度資金の要件を満たさない浅見さんに代わって自ら3500万円ものお金をJA北海道信連から借り、牧場を立ち上げた。用地は、向井地牧場の放牧地を活用。30頭規模のフリーストール牛舎や搾乳機器、大型機械などを揃え、浅見さんに利用させることにした。

向井地組合長が「諦めるな」と激励したのが平成24年の暮れ。牛舎は翌25年の4月に早くも着工し、同年11月には「浅見牧場」の看板が立った。1年に満たない早業だった。

町内屈指の優良経営に

稼働した浅見牧場は、女性一人での作業や、浅見さんの経営理念を反映し、細かな工夫が施されている。

例えば牛舎構造。通常なら天井に張りめぐらす梁がほとんどない。「従業員時代、関節を外したり、腰を抜かした乳牛の扱いに最も手を焼いた。牛の体を釣り上げる大型機械をスムーズに牛舎に入れられ

るよう、邪魔な梁は外した」

飼養規模は自らの能力から逆算して30頭以内に抑えている。省力化に役立つ自動給餌機はあえて導入しなかった。浅見さんは「牛の健康維持で大事なのは常に体調を把握すること。飼槽にエサを置いた時の反応を見逃したら話にならない。自動給餌機任せでは体調の微妙な変化は分からない」と説明する。

搾乳開始からほぼ1年。現在の浅見牧場の乳成分や衛生的乳質は、町内トップクラスを誇る。

宗谷南農協の若山栄営農部長は「乳脂肪分率は4・5％以上、無脂固形分率は9％以上にのぼる。体細胞数は町内の平均を大きく下回り、個体乳量も年間9000kg以上に達する。彼女は成績がずば抜けているから、経産牛1頭当たりの受取乳代は、隣の向井地牧場より高いのではないか」と笑う。

「乳牛１頭１頭を大切にする経営を実践したい」と話す浅見さん

地域のみんなに感謝

10年越しの夢を叶えた浅見さんは「女性一人の就農でも全く問題ない。牛飼いに大事な資質は、腕力よりも牛を観察する目。乳牛を見て『この子おかしいな』と感じられるかどうか」と強調する。

「忙しい毎日だけど、大好きな牛たちに囲まれて満足。こんな楽しい仕事を続けられて罰が当たるのではないかと不安になるくらい。ここまで来るのに、向井地組合長を始め農協や地域の先輩方に支えていただいた。感謝の気持ちでいっぱいです」

満足そうに頷く浅見さんは、今日も真摯に牛たちと向き合っている。

意欲ある若者は宗谷南に集まれ！

向井地信之組合長の話

浅見さんの新規就農を強力に後押ししたのは、飼養管理の腕を見込んでのことだ。女性単身であっても、町の将来の酪農を担う人材だと高く評価した。

ところが、今の制度資金の仕組みは、女性単身の新規就農を想定していない。このままでは、せっかくの有能な担い手が、夢を諦めざるを得ないところだった。だから変則的ではあるが、組合長の私がお金を借りて牛舎を建て、彼女にリースする方法をとった。

女性一人でも立派に経営が成り立つことは、彼女が証明してくれた。今回の仕組みを農協独自に制度化し、意欲ある若者の就農をどんどん後押ししていきたい。酪農を始めたい若者は男性、女性、独身者、既婚者の区別なく、みんな宗谷南に来いと言いたい。全力で応援する。